謹呈仕候　其後之時之趣
趣を拾数可申上筈之処
海之波瀾を有之八潮之感
ハ何も之御新説を以て
之を遂申候　思ふに今日之
只新説の説　何れも
国家の為ニ此新説を
由十分御研究之上
有手之日月を短期間之
出来ニ成満期之暁
御御　之国家の為
申上ル筈ニ御座候　敬白
之寓言中上ル
建国業ハ
而一人ロフチー之国理国体
如何ニ成ル　是れサブライム、
来ル二十五日ニ
原文を山河
此国家の幸福
之時日ハ
国運之発展
真ハ事と

國運之[illegible]推[illegible]時代
美ハ薄ク觀ルニ至ル[illegible]
文化昔日ノ羅馬ニ[illegible]
も[illegible]
諸之東西國運之[illegible]
經綸之[illegible]
試[illegible]
也[illegible]
[illegible]
[illegible]
經[illegible]
[illegible]公[illegible]
[illegible]
[illegible]宮殿も[illegible]バルカン[illegible]也
十[illegible]
[illegible]國[illegible]一
雄飛と[illegible]ステファン
ダヌンボロツツ氏[illegible]至[illegible]石礎
志[illegible]バルガリヤ
之[illegible]
[illegible]一[illegible]子
[illegible]スト井ロツフが[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

既ニ●僅か計りニ至識遠之義
蓮至極易の趣ニ相成候ニ付
至急本国政府の何物かを御解決
相成候様致し度其上ニ於て
勿論非常の決断も相成候
至急也　一大英スケンボロウ之
趣ハ御承知相成候へ共何卒も
傍観不致候様大計策を致し候
経綸も施し候由承知致候
此際之由ハ此度御承知被下候
節ハ何卒御配慮を奉希候
何卒御賢慮の程偏ニ奉希候
此事ハ御地ニ於ても種々
此際之義ハ御承知の事ニ候へ共
実ハ政府に於て大ニ御尽力
此事ハ御地ニ於て種々申上候
至一論申上候ニ付
為之ハ先ツ草卒ながら如是
言ハ追々御目ニ掛り候上ニ別紙
之一篇御覧ニ供へ奉候

明治卅年十月八日　望月小太郎　拝

大隈伯爵　閣下

る教育の爲に一掃せられんとす、此の一掃、若し自然に適するものならば、吾人は之を歡迎せざるべからずと雖も、世界自然の大勢は之に反せり、吾人の自然の性質の啓發せられたる日に於ては、最早陳腐の甚しきものなり、昔歐洲の「セスイット」教徒は人性の自然を罪惡あるものなりと見し、カルヴィンの神學說をプロクラテスの鐵床として、兒童の天性を破壞盡しさんと企て、今日我邦の教師は、最も舊く、又最も狹隘なる保守的新理を鑄型として、兒童自然の性質を形成せんとす、嘆ずべき哉。

斯の如き教育社會の暗潮は、或る流源より發せるなり、曰く、人は如何なる鑄型を用ゐるも、其の如くに造り得らるべしとなすの思想是なり、人の自然の性質は、人類の交通開けたる日にありては、世界自然の大勢と共に進歩すべきものなるを悟らず、又世界自然の大勢は、或る異を棄てしめ、殊を撤せしむるものなることを知らず、昔日に通じたる鑄型は、今日にも亦適すべし、人は生るゝものにあらずして、造らるゝものなりと信じ、而して、遂にこの狹隘なる、守舊なる、保守思想の製造業を以て、教育なりと誤認するに至れり、自然の大教師に反して、人爲の小細工を試みるに至れり、而して、此の誤認は實に吾人の子孫を、將來に過つものなり、我眞誠の進歩思想ある人士は、何ぞ此の教育社會の暗潮を看過せんとするや、余は之を惜む余は之を歎惜するや切なり。

世界より看たる日本

「世界の日本」記者、屢々余に屬文を需めらる、余屢々約して未だ果さず頃來感する處あり乃ち蒼皇筆を走して本題を寄す　　望月小太郎

世界遍歷家（ワオールドトロッター）の船は、大抵歐洲文明の中心點たる、英のリバプール、サウサムプトン、又は佛のマルセールより起航して東行次第に、地中海、紅海を渡りて、茲に蠻風漸く身を吹かんとするの蘇士、亞丁、錫蘭等より益〻極東に近づく比は新嘉波、香港、上海と、濕船通する所眼界一樣總て是れ矇昧未開の野蠻境にあらざるはなし、思ひきや、長風徐に船頭を拂ふの南太平洋上、黑

潮暗に海波を亂すの支那海上、世界遍歷家が、腦中看んと欲して描く所の日本は、實に左の如けんを、「扨ても三十年間に歐米白哲人種が二三百年の徑營に係る一切の文物制度を輸入し同化したる恐ろしき進歩の日本國民！、英露獨佛が十數年來、其内心に於て畏敬したる大清國の皮一重剝き落したる新日本國民の猛進力!!!、陸軍に海軍に、殖産工業に、文物制度、想ふに是れ小歐羅巴を盆池的に縮小したるの日本ならん、其風光、其生活活ける世界の一天國を見ずしては予も中々世界遍歷家たり難し」と。

船横濱に着す、見れば僅かに五六千噸の小蒸氣船すら尙是を陸地に横着けするの埠頭もなく、一二哩の冲までも漕き集まる端艇は、疑もなく南洋土人、又は支那沿海に用ゆる野蠻時代のヲヤヅク船、而かも之を漕ぐ水夫は、四肢五體の赤裸、太甚しきものは、少年の陰部すらも掩はざるに、況してや氣船間近き邊りにて、立小便、褌の結び直し抔、書く筆さへも實は赤面の其有樣、……斯くて東洋第一の良港、ペルリ、バーリス等を經て、現世紀の上半より長きものは四五十年短きも二三十年來、世界の地圖中、Yokohamaと記載したる其一大港の稅關は如何に、荷物の揚卸さへ不自由なるに、其道路、其市街、其住民鼻を垂するの、大口を開くもの、乳房をブラさげる婦人、脛を向き出したる處女、家は燐寸箱の如く、道は山徑の如く、印度南洋にも稀に見る市區の不結搆、先づ兩足の人馬とも稱する人力車上、斯くは奇異の感に擊たれたらん斯くて世界遍歷家は横濱停車場にて、いでや是より勃々たる雄心火の如き、東洋の一大文明國、大日本、其國民四千百萬の大帝都たる東京を看んと欲し、停車場に到れば、カラコロと停車場内の敷石を東西に奔走且狼狽する乘客、頻りに發車の笛聲計りは吹き鳴すも、尙五分十分、甚しきは廿分も動かざる氣車、其客室には、上等室にすら、人の面前にて唾を吐くもの、鼻を吸込むもの大欠呻をかくもの、胡坐の眞中より、チロリと見ゆる何か薄白色の包袋、斯くて、僅か廿哩の短距離に於ける京濱鐵道は、長くも長し、殆んど一時間、而して到る所の停車場、見れば驛夫に叱り付けられ、驛長に頤の先にて方向を命ぜらるも乘客の、手荷物を落するの足袋跣にて飛び出するの、横濱より東京に到る一時間の觀察は、正に是れ歐亞文明二百年の遲速を合點する折柄、氣車の到着は音に聞く新橋停車場と、何ぞ圖らん、寂寞荒寥、日本全國氣車の中央停車場ならんとは、時、偶々、早朝よりの微雨、帝國ホテルまで市内の見物を兼ねて徒歩せんと思へば、憐けなや帝國の首都、東京の街衢は、眞に文字通りの泥海百尺、脛を沒するもの、車の泥に顔より裾までを汚さるゝもの、洋服に下駄、袴に靴、簑笠に赤毛布、巡禮風、乞食風、腕まくりの壯士兵兒帶の番頭、衣肝に至て將に隱し遂げざらんとする事三寸、袖、腕に至て既に乳の側面一半を表はす、夜に入れば、滿市の街燈、死して星の如く、通行の士女、消へて跡なし、一の夜芝居なく、一の音樂館なく、麥酒を飲まんとするの腰掛茶屋、珈琲を味はんとするの露店凡て是れ夢にも存せず、世界の出來事を直送するの外電なく、寸時を爭ふ一の夕新聞なし、さても圖らざりき、斯る寒山空谷の此武陵源中國民は悉く是れ君子ならずんば、即ち將に仙人ならんと思ひの外、神燈漁火よりも影暗き軒の奥、障子に映つるは慥かに有髯洋裝の一紳士、醉步蹣跚、立てば其姿勢、くの字の如く、髮は烏を頭に結び付けたるが如き、二三の紋妓と踊るが如く、舞ふが如き亂座の後影、三味線大鼓に、其意味の分りたらんには驚嘆の外なき卑猥淫靡の鄭聲衛歌、而して此紳士が妻子一族は此不夜城の座敷中にはあらずして、紳士が本宅に、難有く大根と味噌汁、澤庵と御茶漬にて、而かも深更二三時迄、長火針に物思氣なる寢ずの待ち番等、案じ來れば日本國民が其東洋の文明國民たるの前先づ其國民に少くとも人間居家處世上に關はる、世界普通の社界的制裁力、殊に一男一女の天法を敎ゑさるべからさらんと是れ即ち世界遍歷家の眼中に映ずる日本社會的生活の一斑なりとす。」

聞く國會は開け、憲法は行はれ、議會に、新聞に、總て是れ、佛國革命が產みし、人權尊重的の歐洲文明を活用せし新制度の文明國なりと、思はざりき、其内閣大臣は世界人種の大別すら知らざるの人すらもありと然らば内閣鞏固說を說くの前、先づ大臣敎育の必要あり、其國民は只對外政略とて、實力なきの空威を好み其憲法は紙上の光彩あるも、實行上多數政治の大精神に於て血なく骨なしと、而して其議會は黃白を以て左右せられ其政黨は感情の爲に異主義なりと號する等、請ふ憲法政治を說くの前、少なくとも先づ國民の代表者たるm、p、に、一人獨立のゼントルマンライキの生涯を敎ゑざるべからず、是に於て乎、代議士敎育の必要あり、寸時を爭ふ其新聞紙は、百年二百年前の小說艶物を以て、讀者の時好に投じ、甚しきは、懷妊避

妊の廣告藥すらあり、其風俗畫と稱するものは、佛國流の寫實派(ファリス)とて、實は風俗紊亂の怪畫ありと、是に於て乎、新聞雜誌を以て社會の耳目と爲すの前、先づ第一にヲヨーナリストに向つて新聞を聞かしむるの急務即ち新聞記者教育の必要あらん、是れ尙恕すべし、若し夫れ失望次ぐに將に噴飯に堪へざらんとするものは、日本の壯年なり、彼等は日本前途の進歩を以て、必ずや歐洲文明の潮流を追はざるべからざるものとなし、三年五年の洋行中、其費したる金、其學びたる學理、而して歸來匆々、悉く之を盆池大の日本流義に軟化せんとし、曰く、時勢を學ふなり、曰く、日本の國躰制度に用なしと、其曩に在外苦學の砌り、食を節し衣を減じたるの資を以て、購ひ來りたる泰西日進月化の書籍も、歸朝の披露と共に空しく之を高閣に束ね、古書畫、古器物、甚しきは淨瑠璃に、長歌に、强あて小島國民的の日本風を尊拜し、所謂、國躰國風、國粹保存、對外强硬、神州男兒、大和民族等の新文字を以て、漫りに邦家百年の長計を而かも杯盤狼籍、獵官趨俗の樂世的主義中に葬らんとするものゝのみ、況んや其國民が、智力躰力上に於ける國民的教育に於てをや、增して況んや、此小島國民より起て以て、大國的民族となるべき、血の如き、鐵の如き、國民的インスピレーションを以ての精神的、即ち宗教々育なきに於てをや、是に於て乎國民中に人材を求むるの前、先づ人才造り直しの必要あらん、是れ即ち世界遍歷家の眼中に映する日本政治的社會の一隅なりとす。」

更に進んで、日本が日清戰爭以後、俄かに勃興したる其海陸軍備の增加、其の歲出入の不平均は、己れ國資の不足を來たしたるに、況んや、文明國となればなる程、日本人が世界に威張らんと願へば願ふ程、其殖產、工業　交通の文明機關を發達するが爲め、第二に其國資の不足を生ずべく、更に進んで、國家永久の滋養分供給の製造所たる、凡百商工製造品の將來は、勢ひ會社、銀行、工場、等設立せずしてはならぬ今日、即ち第三の國資欠亡を眼前に控へ居れり、之を知る、明治廿九年一月より、本年九月迄、以上運輸交通の機關たる、鐵道、會社、銀行、其他、諸事業に、充たすべき資本不足の總額は、實に廿億萬圓なりといふ、試みに其三分の二を水泡的事業と差引くも、尙七億萬圓の資本を要す、此外、昨年の貿易は五千四百萬圓の輸入超過となり、政府歲出入の不足は、實に六千萬圓に達し、今年度も、想ふに四五千萬圓の輸入超過を來たす

べく、三十一年度に至る、政府歲出入の不足は、是亦二千三百萬圓に達せん、而して是れ啻に決して昨年今年のみならず、今後此趨勢は國運の擴張と共に、必ず底止せざるべし、然るに日本の經濟界中未だ一人の立て、此國運の進行に伴ふ經濟策を講ずるものあるを聞かざるのみならず、電光石火の間に幣制を改革し、曖昧模糊の間に、國家の財政を料理せんとするもの多く如何に交通機關に不便あるも、絕て之が改良を見ず、如何に文明商人の養成之が必要を感ずるも、古風商人の氣受け甚だ面白からず、銀行とは是れ質屋的金貸にして、名こそ誠に製造工業はいへ、其實、座職、手細工の仕事のみ、雨降れば、全國の鐵道、通ずるもの殆と少なく、風吹かば、東京市內の電燈電信、物の用には相立たず扨ても、斯の如くして東亞の平和を保つとか、亞細亞の覇權を握るとか言ふの前、先づ文明流の商人工人よりして之を養生するの必要あらん、是れ即ち世界遍歷家の眼中に映ずる日本經濟的社界の一斑なりとす。」

嘗て獨逸の近世史を繙き、其十八世紀の末代より現世紀の始めに至り、歐洲全陸生殺與奪の全權茲に風雲の寵兒たるナポレオンが掌中に握らるゝの時、分劃せられ、蹂躙せられ、北狄と罵られたる獨逸民族が、當時內に顧みて小邦分裂、パヴリアに、ウッテンバルグに、ハノーヴァに、プロシアに廿五邦の小國的民族が空しく蝸牛角上の爭に世界の大勢を看過し、而して伯林府は正に是れ腐敗墮落の一魔城となり、其社會に、其政治に、其經濟に、世界的遍歷家の眼中に映ぜし當時の獨逸民族なるものは、眞に國民的價値なきものなりしを、記憶せり、多謝す一寒境ナッソーが生みたるヘンリッヒ、フレデリッキ、カール、スタイン氏は實に百年の大望を以て、先づ獨逸宗族の國民的再成を計らんとし千八百〇三年と覺ゆ、伯林大學の起るや、彼は先づ主として古代、希臘、羅馬より以て其當時に及べる、世界大國民が統一的歷史より講じて以て、獨逸國民が將來に向て猛烈火の如き、國民的希望を與へたるを、圖らざりき、未だ百年を經ざる千八百七十年、普佛の戰爭は茲に始めて、旭の如き國民的希望を有する獨逸新帝國を造り、其後未だ三十年ならざる獨逸の今日、已に歐洲大陸の一大覇王とならんとするを、謂ふ勿れ、理想は是れ大言壯語と、理想なきの國民にして、勃興せしもの古より曾て之れあるか、嘆ずる勿れ、日本の前途は吾が一代には望なしと、知らずや、箇人の生命は百

年を以て數へ國家の運命は千年、萬年、否萬々歳を以て之を畫策せざるべからざるを、嗚呼誰か明治のスタイルと爲つて以て其世界より看たる日本國民に白熱猛火の如き國民的希望を與ふるものぞ、昊天若し長へに禍を日本に下さゞらん乎、江山二萬方里の天地、同胞四千百萬の國民中、豈一人の無冠の宰相天下の浪人、世豈に敢て其人なしとせんや其人なしとせんや。

生活現象論

飯沼一雄

(三)精神現象の形狀　精神現象の形狀とは其波動の摸樣を論ずる者なり。精神現象の波動とは物理學の所謂、光線、音響、電氣波の如く眞に波狀を現出する者に非ずして、現象の變遷に生ずる隱顯、强弱、浮沈を形容したるの稱なり、故に英語の「リヅム」に當る。而て此「リヅム」なる語は從來浮沈或は波動と譯せられ、近時又た定時變換律と書

前回正誤

八九頁、面示するは曆面示すの誤植。

九〇頁、一百三は二百三十の誤植。

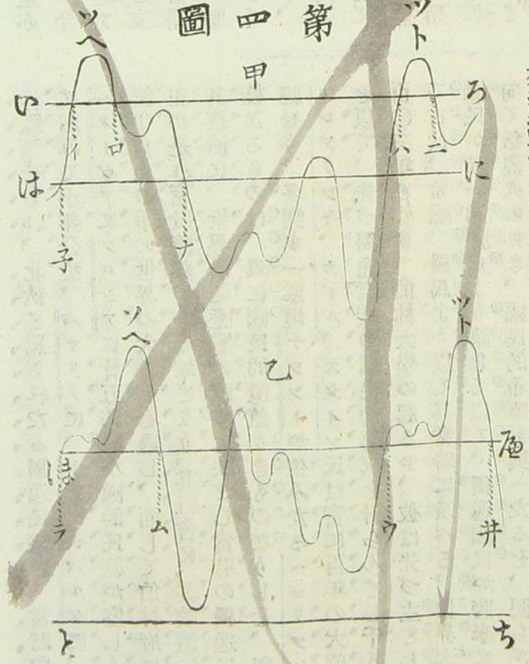
第三圖は甲乙丙丁の位置を誤る、追て正圖を示すときあり。

九一頁、證する自然は證する自說の誤。

九二頁、下段、九行目、波狀線は波狀の誤。

此他五個の誤植あり、讀者の察知し得る者なれば擧げず

第四圖



辻早稲田
大隈伯爵

獨

三十日

青八

赤坂氷川八

澤月春日